

【床の間コーナー連動企画】

エイブル倶楽部 公開講座

鹿島ふるさと探訪 ～鹿島鍋島家の歴史を大村・諫早・神代に訪ねて～

- ・日時 平成26年11月12日・16日 9:30～16:30
- ・順路 エイブル → 大村市／松林飯山遭難碑 → 楠本正隆屋敷 → 旧円融寺庭園 → 五教館御成門 → 大村城 → 諫早市／諫早歴史美術館 → 眼鏡橋 → 雲仙市／神代鍋島邸 → エイブル
- ・講師 鹿島市民図書館学芸員 高橋研一

《鹿島藩と大村藩～鍋島直彬・原忠順と松林飯山～》

今回のふるさと探訪は、エイブル2階床の間コーナーで開催している「鍋島直彬^{なほよし}公展」の連動企画として開催しました。昨年は鹿島近辺を尋ねましたが、今年は鹿島鍋島家とゆかりのある長崎県の大村・諫早^{こうじろ}・神代をみなさんと訪ねることにしました。

鍋島直彬は鹿島鍋島藩の最後の藩主として旭ヶ岡公園に銅像があることで知られていますが、どのようにして直彬が幕末に尊王攘夷思想に染まっていき、明治維新で功績を立てていくことができたのかを考えていくうえで非常に重要な人物が2人います。1人は松本奎堂^{けいどう}という三河の国（今の愛知県）の藩士で、もう1人は松林飯山^{まつばやしはんざん}という大村藩士です。直彬はこの2人からすごく影響を受けて、尊王攘夷思想に染まっていきます。

松林飯山は1839年に生まれて1867年（慶応3）にわずか29歳で暗殺され短い生涯を終えています。飯山は大村藩主に付き添い江戸に上り、安積良齋^{あづみりょうさい}の塾に入っています。安積良齋は吉田松陰・高杉晋作・岩崎弥太郎などの学問の師匠として、江戸の思想史では有名な方です。飯山は安積先生の許で勉学に励んでいます。その後、大村に帰国して、大村藩の藩校である五教館^{ごこうかん}で後進の指導に当たっています。

幕末になると、どこの藩でも、幕府を支える派閥と、幕府ではなく天皇を支える派閥のふたつに分かれてきます。これが佐幕派と尊王派との対立になってくるわけですが、飯山はこの尊王派、言葉を変えると倒幕派の筆頭でした。そのため、藩内の反対勢力によって暗殺されてしまいました。



松林飯山(『飯山文集』)

わずか29歳で亡くなるわけですが、その存在は鹿島藩に大きな影響を与えてきます。その最も影響を受けた人物は原忠順です。忠順は直彬の最も信頼する、側近中の側近です。忠順が江戸に上ったときは21歳、その時すでに飯山の名前は非常に有名になっていたのです。どういう人かということで、忠順は飯山の許を訪ねました。そこで芽生えた交流がその後の鹿島に大きな影響を与えていきます。2人とも、漢詩文にもものすごく通じていたので、お互いに漢詩文の贈答を繰り返しています。飯山は『飯山文集』、忠順は『有悔堂遺稿』として漢詩文集が活字になっています。その他にも、活字になっていない漢詩文の史

料がたくさん残されています。そういう史料を見ていくと、幕末の時代を駆け抜けた彼らの心情や考えを知ることができます。

この企画のために、大村や諫早で古文書の調査を行いました。その調査の時に見つかったのが、飯山が忠順に送った漢詩などを貼り合わせた掛軸です。原忠順の家から流出した後、行方不明になっていたものです。これを大村市が購入していたことが今回判明しました。

飯山の漢詩には鹿島の原忠順（忠順）を訪ねた時に詠んだ漢詩という詞書ことばがきが添えられています。漢詩は詞書（どういう情景で詠まれたものかという説明文）の後に漢詩が続く形態になっています。この詞書を読んでいくと、原忠順と飯山との交流の様子が具体的にわかってきます。

このように忠順と飯山は非常に良好な関係を結んでいきます。さらに忠順を通して、直彬も飯山の影響を強く受けていきます。

直彬は6歳の時に藩主に就任します。非常に幼いときに藩主に就任したため、直彬の教育係を誰にするか、誰に学問を学ぶかは大きな問題でした。その時、忠順が直彬に是非紹介したいとして引き合わせたのが松林飯山でした。こうやって飯山との交流の中で、直彬は尊王攘夷思想を理解し、その実現に向かっていきます。

幕末の佐賀本藩では、副島種臣や大隈重信などの後の維新の元勳たちが当時の保守派によって迫害される状況になります。佐賀藩で生命の危機に瀕した彼等を保護して、長崎から外部に逃がすことを直彬はしていますが、そうした思想を直彬に植え付けた人が松林飯山なのです。

それからもうひとつ、鹿島藩と大村藩の関係でいくと、大村藩校五教館で鹿島藩士が学ぶことが頻繁に起こっています。これも原忠順と松林飯山との交流の中から生まれてきたものです。鹿島藩士の中でも、例えば、松村操一、田中馨治あきぢ（田中鐵三郎の父）、八澤礼之進（戊辰戦争に従軍）等は、忠順の紹介によって、直接飯山の許で学問を学んでいます。それから大村藩の藩校に留学した人物として、山口竹一郎などがいます。谷口藍田の漢詩文集『藍田谷口先生全集』には山口竹一郎の墓に刻まれた碑文が載せられています。そこには、山口竹一郎がまず大村藩の五教館で学び、その後日田の咸宜園かんぎえんで、学問を学んだことが書かれています。



五教館御成門

当時、藩校で学ぶ学問は厳しく定められていて、自由に知りたいことを学ぶことは難しい状況にありました。佐賀藩では、幕府に対して敵対するような思想を学ぶことはほぼできないような状況にありました。そうした中で、大村藩は松林飯山が祭酒まついしゅ（校長）をしていたので、新しい思想や尊王思想を学ぶことができる魅力的な場所でした。そのため、鹿島藩士が大村に遊学して、新しい思想や尊王攘夷の思想を学ぶようになっていきます。こうした人達に支えられて、直彬は活躍することができたのです。

これまで直彬の時代を見るときに、直彬自身の資質、あるいは能力が非常に重視されてきたのですが、こうやって忠順と飯山との交流を通じて、直彬が思ったことを実現できるような人材が鹿島に育っていたことが非常に大事だったことがわかっていただけないかと思います。

《旧楠本正隆屋敷》

大村藩士楠本正隆は幕末に勤王派として活躍し、維新後は、東京府知事や衆議院議員・議長を歴任しました。直彬の日記には、衆議院議員時代に正隆と交流している記述が見られます。この屋敷は明治3年に建てられていますが、近世武家屋敷の様式をよく伝える貴重な文化財になります。

武家屋敷自体は各地に残されており、珍しく感じられないかもしれませんが、しかし、鹿島藩にも城下町があって、いろんなところにこのような屋敷があったはずですが、現在、内部に入って屋敷の様子を見学できる形で残されているところはおそらくないと思います。そうした意味では、当時の住いの様子をどうやって引き継いで、それを町並みなり観光につなげていくかというところの、地域によっての取り組みの違いも感じていただけるのではないかと思います。

大村藩で活躍された志士は三十七士として顕彰されています。筆頭にあるのが松林飯山、三十七士の中でも別格の筆頭に当たります。この中にある渡辺清の娘である石井筆子は津田梅子らとともに活躍して、知的障害児教育に尽力された方です。五教館御成門の隣に胸像が建てられています。

このように、維新で活躍した自負がある藩に関しては、自分の藩の功績を広めるために、「〇〇士」といった、数字合わせ的なくくりを作り、顕彰することがよくみられます。

鹿島の場合は、直彬をはじめ活躍した人達はたくさんいますが、こういう形で顕彰されてはいません。幕末維新から鹿島の近代化にいたるすべてを直彬の功績とする歴史観があまりに強く、直彬を支えた人々に対する視点が育ちにくかったことがあります。例えば、飯山と交流のあった田中馨治は直彬の沖繩統治を支え、山口竹一郎は鹿島の近代教育を支えています。また傘田豊は直彬がアメリカの行政視察に同行し、通訳として大活躍しています。直彬が様々な事業を興し、成功することが出来たのは、直彬の目的を理解し、そのために尽力した藩士がいたという側面があったことも忘れてはなりません。

《旧円融寺庭園》

円融寺は大村氏が徳川将軍家の位牌を祀るために創建した寺院で、維新後は護国神社となりました。数少ない江戸初期の石組庭園として貴重な史跡で、国指定名勝となっています。

鹿島鍋島家の場合は、鹿島における大名庭園の記録が今のところ確認できていません。遺構としても当然残されていないのですが、こういうものが当時どうされていたのか、屋敷を飾るものとしてなければならぬものなのですが、今のところ鹿島鍋島家にはこういう庭園を作った記録なり痕跡は確認できていません。



《大村城くしま（玖島城）》

大村城は慶長3年（1598）から4年頃、豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した大村喜前よしあきによって築されました。現在、本丸の中は大村神社に変わっています。江戸時代の藩主の居城は明治時代になると、公の権力に撤収されます。そのため、公の権力の施設がお城の中に立っていく事例が非常に多いと思います。天守

閣などを復元して、博物館、資料館になる事例、それからお城の中に県庁などが立つ事例、佐賀もお城の中に県庁や博物館、学校が立っていると思います。鹿島もお城の中に高校、公の教育施設が立っている状況です。

《鹿島鍋島家と諫早家》

諫早家は家の格としては佐賀本藩の親類同格に当たります。多久・武雄・須古と同じランクの佐賀藩の家老になります。石高は2万6千石、鹿島が2万なので、鹿島より大きい石高を持っている家臣です。

鹿島鍋島家と諫早家との間には、何度か婚姻関係が結ばれています。一番大きいのが、8代藩主に鍋島直宜、この方は小城鍋島家から養子に來られて鹿島藩を相続しました。その直宜の娘が諫早家の12代当主であった茂洪に嫁いでいます。

こうした婚姻関係が結ばれていると、いろいろな交流が起こってきます。そうした交流が史料として残されているのが和歌や漢詩の贈答です。「松葉集」という和歌集は茂洪のお母さんの還暦をお祝いして作られました。鹿島の直彝の妻儔子もお祝いの和歌を寄せています。儔子は鹿島錦の創設者として知られる篤のことです。

これから検討していかなければならないことが多いのですが、還暦であったり喜寿であったりというときに、お祝いの和歌集や漢詩集が作られることが多いです。特に時代が降るほど、たくさん残されています。ただ、そのほとんどが女性の慶祝に関することです。ひとつには、当時女性の方が長生きをして、藩主が若くして亡くなる場合が多かったこともあるのですが、こうした女性を中心とした人間関係のネットワークが、佐賀、鹿島、諫早を含んだ形で成立していたのが、江戸時代後期の佐賀藩の文化的な特質のひとつとしてあげられます。

それから鹿島と諫早の関係でいうと、直彬の時に諫早家の相続問題が起こります。直彬の兄茂彬の娘神代子は諫早家に嫁いでいます。神代子のお兄さんも絡んで、諫早家の相続問題は深刻化していきました。そこで直彬は、親族の仲裁、特に自分の甥っこを諫めるかたちで、鍋島家と諫早家との関係、それから諫早家の安定的な運営に深く関わっています。この諫早家の相続問題は直彬が晩年に取り組んだ案件です。

《諫早・栄田陣屋》

天保11年(1840)鹿島藩は佐賀本番の命令を受けて、栄田に陣屋を設けました。江戸時代末期に、ロシアやイギリスの脅威が高まると、佐賀藩は至急長崎に向かえるように交通路を整備し、要衝に兵を駐屯させます。その時に、鹿島藩が陣屋を定めるように設けられたのが栄田です。

江戸初期、佐賀藩では三部上地、すなわち所領の3割を召し上げる政策をとっています。その時に、諫早を一円で持っていた諫早家から、全体の3割の所領が藩の方に没収されています。その時に諫早家から切り離されて佐賀藩に組み込まれたのが栄田などです。

鹿島鍋島家の場合だと、塩田の八天神社あたりが、もともとは鹿島領だったのですが、三部上地の時に召し上げられて、鹿島鍋島家から離れていった所領でした。

《諫早市美術・歴史館》

諫早市美術・歴史館は、今年4月にオープンしたばかりの美術館なので、いろいろな最新の展示方法などが設けられています。特に、デジタルで投影した画像を使って、いろんな史跡を見たり体験したりす

ることができるというのが大きな特色となっていますので、そこら辺も見ていただければと思います。

《諫早公園・眼鏡橋》

眼鏡橋の技術は江戸時代初期に黄檗宗と一緒に日本に入ってきた最新の橋の作り方です。当時、宗教が学問・文化・技術と一体となって入ってきます。自分の宗派を受け入れてくれたところには、技術なり文化なりを提供するという形です。

昭和32年の諫早水害の時に、眼鏡橋は流木等をせき止めて、市街地に被害を拡大させてしまいました。そのため壊される計画もあったようですが、現在地に移築して残されています。長崎の大水害の時も同じようなことになっています。長崎の場合は、川のバイパスを造って、眼鏡橋をその場で保存しています。能古見にあった眼鏡橋は明治時代に架けられたものですが、昭和37年の水害のあとで壊されています。いろいろな経緯や状況があって、どのように残して活用していくかの違いが、それぞれの地域なり文化性によって出てくると思います。

《鹿島鍋島家と神代鍋島家》

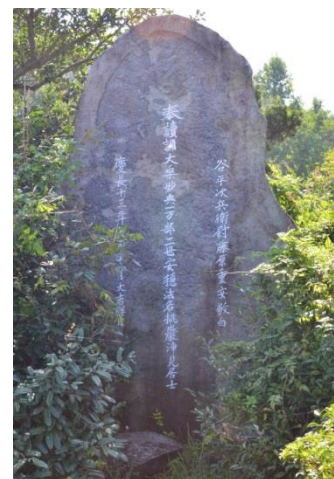
神代鍋島家は、佐賀藩祖直茂の兄信房が初代になります。鹿島を支配していた信房が神代に移り、その後鹿島を治めた忠茂が初代の鹿島藩主になります。神代鍋島家は5千石の所領を持っており、佐賀藩の中では家老に位置しています。鹿島鍋島家と神代鍋島家の関係をみていくと、3代藩主の鍋島直朝の最初の奥さんは神代鍋島家から鹿島に嫁いできた彦千代です。彦千代は直朝との間に、直孝と直條という2人の子どもを産んでいます。直孝は体が弱かったこともあり、藩主を相続せずに、黄檗宗の僧侶となりました。断橋和尚の名前の方が有名です。断橋和尚が父と弟の協力を得て創建したのが鹿島鍋島家の菩提寺である普明寺です。弟の直條が4代藩主として鹿島藩を相続しています。直條は中央の文人と交わり、多くの漢詩文・和歌を遺した文人大名として知られています。

彦千代が鹿島に嫁いできたことによって、鹿島藩の中で一つの大きな流れができてきます。それは、彦千代が龍造寺家の血を引いていたことです。彦千代のお母さんが龍造寺隆家のひ孫に当たります。そのため、鹿島鍋島家の当主は龍造寺隆信と鍋島直茂、その2人の血を引くことになります。こういうふうになってくると、佐賀本藩の藩主と受け継いでいる血の面では全く差がないということで、鹿島藩主が次第に佐賀藩に対して、非常に挑戦的というか、佐賀藩が乱れていけば、鹿島藩主である自分が佐賀藩を相続して佐賀を良くしていこうという動きを見せていきます。そのため、佐賀藩から鹿島藩が危険視されるようになっていきます。最終的には、6代藩主の鍋島直郷は佐賀本藩から危険視されたこともあって隠居に追い込まれています。そして直郷の血を引かない方が養子として送り込まれることになります。その段階で、直朝以来続いてきた鹿島鍋島家の直系が途絶えることになります。

戦国時代末期、龍造寺隆信は佐賀の中心部を抑えると、周辺に勢力を拡大していきます。その中で、天正4年(1576)には有馬方が優勢であった藤津地域にも侵攻してきます。最終的に藤津郡全体を龍造寺隆信が支配し、藤津を支配するために送り込まれたのが鍋島信房でした。信房の家臣団が大きく2つに分かれています。ひとつは信房を支える代々の譜代の家臣です。もうひとつはもともと藤津にいた人たちが新たに龍造寺に服属した外様の家臣です。原氏、嬉野氏、犬塚氏などが外様の家臣として、信房に従っていくことになります。こうした2つの家臣団を抱えていた神代鍋島家、当時はまだ鹿島にいた信房

たちなのですが、慶長 13 年に信房たちは鹿島から神代に移っていきます。この時、譜代の家臣は神代に付いていきますが、外様の家臣は鹿島に残り、鹿島藩士として存続していくことになります。

藤津を支配していた時期の神代鍋島家に関する資料はものすごく乏しく、当時の実像はわかりません。蟻尾山にある經典読誦供養塔は慶長 13 年に信房の家臣谷平次兵衛重安が建立したもので、神代鍋島家が鹿島を支配していたことを物語る数少ない遺跡です。また、鍋島勝茂の年譜には、慶長 13 年信房は養子茂教(後藤家信子)に鹿島領と藤津衆、実子茂昌に神代領を譲ったとの記述があります。年譜の典拠を含めて、史実の確定という基礎的作業が十分になされていないのが現状です。



蟻尾山の大乘妙典塔

《早逝の英主鍋島直晴》

鹿島藩の 11 代藩主鍋島直晴^{なおほろ}は 9 代直彞の長男として生まれましたが、幼くして神代鍋島家に養子に出されました。神代鍋島家を継いだ直晴は鍋島茂蘇と名乗っています。神代鍋島家は佐賀藩の家老であり、実際に政務を司る立場にありました。そのため、家老は藩校弘道館での勉学が奨励されており、弘道館で教育にあたった多久の儒学者草場佩川^{はいせん}の日記には勉学に励む茂蘇の姿が記されています。

そうした中、当時の鹿島藩主が茂蘇を養嗣子とすることを佐賀藩に願い出ます。直晴は 6 月に鹿島藩主となり、8 月参勤交代途上の京都伏見にて急死しました。藩主の在任はわずか 2 ヶ月、19 歳の短い生涯を閉じました。

短命であった直晴はこれまであまり注目されてきませんでしたが、直晴の年譜には英邁であり、早逝を惜しむ逸話が記されています。それを裏付けるのが「直晴公御遺稿集」という直晴自筆の漢詩文集です。神代から鹿島に移る時の感慨から始まり、参勤交代の途上の一谷で途切れている漢詩文は直晴の高い教養を示しています。直晴は佐賀藩家老として政務に精励し、また高い文化性を身に付けていた有能な藩主であり、天保 14 年の直彬誕生に先立つ天保 10 年に鹿島は現在では忘れ去られた英主を失ったといえます。

《鍋島直縄のドイツ留学と鍋島桂次郎》

鍋島直彬の養嗣子直縄^{なおなだ}がドイツに留学した際に世話したのが神代鍋島家当主鍋島桂次郎です。直縄は明治 44 年に大学を卒業した後、ドイツに留学します。その時、桂次郎はベルギー公使として赴任しており、直縄をヨーロッパで出迎えて、ドイツに無事に送り届けています。

この時、桂次郎が直彬に送った書翰には、フランスのマルセイユまで直縄の出迎えに行き、パリを案内したこと、直縄が持参した「ムツゴロ」の評判が大変良かったことが記されています。鹿島鍋島家の史料の中で、ムツゴロウという名前が出てくるのは、おそらく今のところはこれだけしか確認されていないので、珍しいものと言えるかもしれません。

見知らぬ異国に養嗣子を送り出した直彬にとって、ヨーロッパに滞在する同族はとても頼もしく、直縄の壮健ぶりを伝える桂次郎の書翰に安堵したことでしょう。

《神代鍋島邸》

神代鍋島邸を中心とするエリア一帯は国の伝統的建築物保存地区に指定されています。邸宅内部はこれまで外観だけの見学でしたが、今年2月から内部の一般公開が始まっています。

神代鍋島邸を訪れると最初に私達を迎えてくれるのが幕末に建てられた長屋門です。鹿島鍋島家の中川屋敷の門は赤門で、当主がいる時だけしか開かなかったと聞いています。神代邸では長屋門を挟んで手入れが行き届いていた竹垣が続いています。中川邸はこの竹垣がぼうぼうに生えていて、「トンさんやぶ」と呼ばれていたと聞いています。

神代鍋島家の屋敷の玄関には近代邸宅の形態がよく残されています。佐賀藩・鍋島家、具体的には佐賀本藩、小城・蓮池・鹿島の3支藩、諫早・武雄・多久といった上級家臣を見渡しても、近代の屋敷の形態がよく残されているのは神代だけです。当時、林業で比較的潤っていたそうです。それで、鍋島林業の拠点でもあったので、経済的にもよく続いたと聞いています。

中川邸の場合は子爵家の屋敷になるので、これよりも規模が大きかったのでしょう。直彬は明治24年に東京から鹿島に転籍し、中川邸を本拠とします。また、中川邸は単なる住居としてだけではなく、藤津郡に広大な田畑・山林を所有する鹿島鍋島家の家政機関が置かれた事務所でもありました。その後、直縄が昭和4年司法大臣秘書官となり、直縄一家は東京に移住しますが、中川邸の重要性は損なわれることはありませんでした。

完全に取り壊された中川邸の様子は古写真のみでしかうかがい知ることができません。ただ、当時の建築様式を現在に伝える神代鍋島邸に立つと、在りし日の中川邸を偲ぶことができます。

今日は鹿島鍋島家にゆかりのある大村・諫早・神代をみなさんと一緒に訪ねました。私達の先人はさらにその前の世代から引き継ぎ、そして次の世代に託した貴重な文化遺産をたくさん遺してくれています。それは文書・建築・景観など目に見えるものだったり、伝承・記憶・信仰といった目に見えないものもあります。さらに日常の生活に追われている時には気づかないけれど、ふとした時、あるいはその土地を離れた時に気づくその土地の魅力があったりします。

大村・諫早・神代それぞれが独自の文化遺産との共存のあり方、魅力ある街づくりの中における文化遺産の位置づけを模索・構築している様子が感じていただけたのではないかと思います。今回のふるさと探訪企画が鹿島の文化遺産の保存や再発見、ひいては魅力ある鹿島の地域づくりに生かしていただくひとつのきっかけとなれば幸いです。



神代鍋島邸